（蒲　原　宏）

〔大空社・東京都北区赤羽二―三六―一二、電話〇三―三九〇二―二七三一、平成五年十月刊、上巻四四五ページ、下巻二七一ページ、四八、〇〇〇円〕

室賀正信著『沼津・室賀病院―医系家族百年の記録―』

本書の中心人物室賀録郎は明治九年東京医学校を卒業し、同校助教となった。十二年たまたま録郎の担当患者を見舞に来た江原素六駿東郡長（のち貴族院議員）にその博識を認められ、ちょうど駿東病院で院長を探していたので、時の大学医学部綜理心得長與専斉に懇望し、録郎の承諾も得て駿東病院の院長として赴任して貰った。

本書は室賀の家系、室賀録郎と沼津の病院経営、後継者―土屋国太、医学に貢献する室賀一族の四章からなっているが、著者が最も力を注いだのは第二章室賀録郎と沼津の病院経営と思う。録郎が沼津に赴任すると、名声をききつけて、四方から患者が集まった。また駿東郡全体の公立病院として、沼津だけでなく、御殿場、佐野、静浦等にも分院あるいは出張所を設けた、この章では東京の大学と地方医療についてかなりくわしく述べている。

録郎は寡黙・温厚篤実でしかも丁寧親切であった。また生地小諸の親戚の人達にも同様であったので、小諸から出て来て厄介になった人も多かった。著者定信氏は早大を卒業し満鉄調査部に勤務ののち、東京海上火災の常務取締をつとめ、のち大来佐武郎（元外相）らと綜合研究所フォーラムを共に創設している。その父は録郎の甥で、陸軍士官学校卒、日露戦争にも従軍したが、大正六年当時の軍縮政策のため少佐で退役となり、同年録郎をたよって、室賀病院に入り事務を担当した。

第三章では後継者土屋国太についてのべている。彼は長野県沓掛（現中軽井沢）の生れで、小諸の医師佐野義質の紹介で録郎を紹介されて、沼津に出て沼津中学を卒業した。録郎は国太を我が子のように可愛がって面倒をみた。明治四十五年国太が京都府立医専を卒業すると、録郎の長女栄子の夫筧繁の勤める台湾総督府付属病院内科に就職し、のち外科に転じ、外科医としての修業をした。

大正三年台湾から帰った国太は室賀病院に移り、四年録郎に代って院長に就任した。その前録郎は駿東病院長を退職し、私立室賀病院を経営していた。国太は侠気のある人望家として、病院の発展に盡すとともに、町民の爲にいろいろと努力した。

著者定信氏は少年時代、この室賀病院の一族である室賀・土屋の子供たちと親しく遊んだが、その思い出が随所に書かれている。

二度に渡る大火災と空襲によって、室賀病院は今はなく、資料等も烏有に帰したので、詳しい事は不明だが、記憶によれば沼津一、二の病院であった。

第四章医学に貢献する室賀一族では、室賀・土屋家の医師として活躍した人々をくわしく紹介している。ここではその名前と役職・続柄等を簡単に記しておこう。

室賀不二男　錄郎の三男、元都立豊島病院長。

土屋健三郎　国太の次男、元産業医科大学学長、公衆衛生学。

土屋武彦　国太の三男、産業医科大学名誉教授、放射線医学専攻。

村上泰二郎　国太の長女の夫、武彦の同窓生、清水市で耳鼻科開業。

筧　繁　錄郎の長女栄子の夫、入沢達吉の高弟、千葉医科大学教授、侍医、内科。

筧　弘毅　筧繁の長男、千葉大学名誉教授、日本放射線医学の開拓者。

筧　潤二　筧繁の次男、医師、ピアニスト、日本大学教授（音楽）。

室賀昭三　錄郎の次男靖雄の末子、前日本東洋医学会会長。

なお一部の方は割愛し、経歴はすべて省略したが著者との関係などエピソードを語り、興味の深い紹介である。

とにかく本書は肩のこらない、しかも医史学的に関心の深い本である。

（土屋　重朗）

〔西田書店・東京都千代田区神田神保町三―一〇、電話〇三―三二六一―四五〇九、一九九二年八月発行、二、〇〇〇円〕

山本俊一著『日本らい史』

人に歴史があるように、病にも歴史がある。かつては猖けつをきわめた病も環境の変化や治療薬の登場によって屈伏され、忘れ去られるものもあれば、風邪のように、いつまでも寿命をながらえているものもある。病の生活史、それはまた豊かな個性をそなえたものである。

ハンセン病は少なくとも日本においてはまもなく消え去ろうとしている病のひとつであるが、この病の歴史ほど強烈な個性を有したものは他にないであろう。古代以来、この病に襲われた者は正に生きながらの死を体験させられている。ケガレた者、仏罰・神罰を受けた罪人と意味づけられ、それゆえに人であって人に非らざる非人と前近代社会では位置づけられた。病者は病苦に加えて社会的な死を宣告され、乞食の生活を余儀なくされていたのである。

近代国家のハンセン病への取組みは、条約の改正により外国人が内地に雑居する段階に至った明治末にはじまる。欧米ではすでに消滅していたハンセン病がわが国に存在することを恥辱と考えた政府は、浮浪患者の徹底した隔離政策をとることになる。それまでは欧米のキリスト教宣教師らが中心となったハンセン病施設がわずかに営まれていたのに過ぎなかった。アメリカの排日政策への反発と日露戦争に勝利した大国意識が国公立の療養所建設を推進させる原動力となり、在